

女子大学生のヘルス・コンサーンについて

江口篤寿、矢吹恭子

はじめに

現在、健康教育の重要性が強調されているが、学校における健康教育カリキュラムは必ずしも適切なものとは思われない。これは一つには、健康教育の専門家が重要と考える健康問題と、一般の人々が重要と考える健康問題との間にギャップがあるもにかかわらず、それをふまえた上での健康教育カリキュラムが作られていないためであると思われる¹⁾。

これまで、わが国では健康に関する意識調査は割合に広く行われているが、どのような健康問題を気がかりと考えているかというような調査が見当らないようである。これは一つにはヘルス・コンサーン (health concern) 「健康について気がかりなこと」という概念を端的にあらわすことばがないためと思われる²⁾。

そこで、著者らは1983年に、一般の人々は、現在の日本で何が健康上の問題であり、そのまま放っておくと困る健康問題にはどのようなものがあると考えているかを知るために、ヘルス・コンサーンに関する調査として、当時、わが国で話題としてとりあげられていた健康問題34項目について、それぞれ重要な問題と思うか否かを、全国小、中、高校の保護者を対象として調査を実施した³⁾。ついで、1984年に、保健関連医療職と一般の人々との間に、健康問題の考え方について、どのようなギャップがあるか、また、保健医療職(医師、保健婦等)と学校における健康教育担当者(保健体育教員、養護教諭)の職種のちがいによって、健康問題に対する問題意識にどのような差異があるかを明らかにするために、保健所医師、保健所保健婦、開業医師、中、高校の保健体育科教員および養護教諭を対象にして、一般の人々(小、中、高校の保護者)に対して実施したものと同様の調査様式を用いて調査した⁴⁾⁻⁶⁾。

更に、1986年に、青年のヘルス・コンサーンを知るために、男女大学生を対象として、これまでと同様の様式を用いて調査を実施した⁷⁾。

この調査実施後、数年を経過し、日常の話題やマスコミでとりあげられる健康問題に、若

干の移り変わりがみられるので、再度、ヘルス・コンサーンについて調査することとした。

調査対象と調査方法

本学生生活学科、被服学科、短期大学生活コースおよび被服コースの学生に対して、平成3年5月、授業時間を利用して調査票を配布し、その場で記入させ回収した。337名の学生から回答を得たが、回収率は100%であった。

調査票は、現在、重要な健康問題であり、そのまま放っておくと困ると考えられるような重要な健康問題12項目を列記し、各項目ごとに、①非常に重要な問題であると思う、②多少重要な問題であると思う、③大した問題ではないと思う、④わからないの4区分のいずれかを選ばせた。更に、新聞、テレビ、ラジオの読、視、聴の状況、つまりマスコミ情報源の利用状況、および、政治や社会、保健医療関連記事ならびにボランティア活動への関心の有無を3段階区分で選ばせた。

調査結果と考察

健康問題12項目については、各区分の出現率は表1に示すとおりである。更に、「非常に重要」と回答した者に3点、「多少重要」と答えた者に2点、「大した問題ではない」と回答した者に1点を与え、回答総得点を回答者数で割った数を健康問題意識度とし、これも表1に示した。

新聞、テレビ、ラジオの読、視聴の程度や、政治・社会、保健関連記事およびボランティア活動への関心についての各区分の出現率は表2に示した。

また、これらについては、「非常に…」と回答した者に2点、「ときどき、あるいは多少…」と回答した者に1点、「ほとんど、あるいは全くない」と答えた者に0点を与え、回答総得点を回答者数で割った数をスコアとし、これも表2に示した。

また、健康問題と情報源となるマスコミ利用状況や政治・社会、保健関連記事、ボランティア活動とのかかわりを見るために、それぞれのクロス集計を行い、それぞれについてカイ2乗検定を行い、P値が0.05以下のものを表3に示した。

健康問題に対して、「非常に重要」と答えた者の頻度は、最高89.0%から最低33.6%まで多様であるが、頻度の程度によって、80%台、70%台、50%台および50%未満の4つのグループに区分してみると、各グループ毎に健康問題に共通の性格があるように思われる。(表4参照)

第1グループは、89.0%の「海洋汚染」、82.5%の「大気汚染」、82.5%の「地球温暖化」、

表1 健康問題への意識

①非常に重要 ②多少重要
 ③あまり重要でない ④わからない

健康問題	健康問題意識度	頻度			
		①	②	③	④
1 出生率低下	2.41	51.3%	39.2%	8.6%	0.9%
2 若い女性喫煙者増加	2.14	33.6%	48.2%	17.0%	1.2%
3 アルコール中毒患者増加	2.28	43.5%	44.9%	7.7%	3.9%
4 エイズの感染者増加	2.78	80.1%	18.1%	1.2%	0.6%
5 がんによる死亡者増加	2.48	57.7%	35.1%	4.5%	2.7%
6 交通事故死亡増加	2.46	55.8%	36.2%	6.5%	1.5%
7 過労死増加	2.72	76.6%	19.9%	1.8%	1.8%
8 ぼけ老人、ねたきり老人増加	2.70	73.4%	24.0%	0.9%	1.8%
9 排気ガスによる大気汚染増加	2.80	82.5%	15.4%	1.5%	0.6%
10 農薬等による水の汚染増加	2.77	80.7%	17.2%	0.9%	1.2%
11 原油流出による海洋汚染増加	2.86	89.0%	9.5%	0.3%	1.2%
12 地球の温暖化進行	2.75	82.2%	13.6%	0.9%	3.3%

(N=337)

表2 マスコミ利用、社会等への関心

(N=337)

項目	頻度					スコア	
新聞	毎日読む	30.9%	時々読む	52.5%	読まない	16.6%	1.14
ラジオ	よく聴く	11.3%	時々聴く	40.4%	聴かない	48.4%	0.63
テレビ	よくみる	63.8%	時々みる	33.2%	みない	3.0%	1.61
政治・社会への関心	非常にある	12.2%	多少ある	75.3%	ない	12.5%	1.00
保健医療記事への関心	非常にある	18.4%	多少ある	71.2%	ない	10.4%	1.08
ボランティアへの関心	非常にある	11.3%	多少ある	57.3%	ない	31.5%	0.80

表3 女子大学生の健康問題意識のグループ分類

第1グループ

原油による海洋汚染	2.89	(89.0%)
排気ガスによる大気汚染	2.80	(82.5%)
エイズ	2.78	(80.1%)
農薬による水の汚染	2.77	(80.7%)
地球の温暖化	2.75	(82.2%)

第2グループ

過労死	2.72	(76.0%)
ぼけ、ねたきり老人	2.70	(73.4%)

第3グループ

がんによる死亡	2.48	(57.7%)
交通事故による死亡	2.46	(55.8%)
出生率低下	2.41	(51.3%)

第4グループ

アルコール中毒	2.28	(43.5%)
女性の喫煙	2.14	(33.6%)

表4 健康問題意識とマスコミ・社会等への関心との関連

出生率低下*テレビ	P<0.05
出生率低下*ボランティア	P<0.05
女性喫煙*ラジオ	P<0.05
アルコール中毒*ボランティア	P<0.005
過労死*ボランティア	P<0.05
水の汚染*新聞	P<0.005
地球温暖化*政治・社会	P<0.05

80.7%の「水の汚染」および80.1%の「エイズ」であり、エイズ以外はすべて、いわゆる公害とよばれる環境問題である。エイズも環境に存在するエイズ・ウィルスによって感染することから、広い意味では環境問題という考え方も可能とおもわれるので、第1グループは環境問題とってよかろう。

第2グループは、76.0%の「過労死」、73.4%の「ぼけ、ねたきり老人」で、これらはいずれも最近、よくマスコミでとりあげる問題であるが、社会のしくみに起因する問題と考えてよかろう。

第3グループは、57.7%の「がんによる死亡」、55.8%の「交通事故死亡」および51.3%の「出生率低下」で、これらもマスコミの話題になっている問題である。

第4グループは、43.5%の「アルコール中毒」と33.6%の「女性の喫煙」で、これらはいずれも健康にマイナスに作用するライフスタイルにかかわる問題である。

「非常に重要」と答えた者の頻度が高い項目は健康問題意識度も高いのは当然で、表4は、健康問題意識度の高い方から低い方へ順にならべ、かつ、前記の4グループに分類して示したものである。

今回の調査で、環境問題に高い意識度がみられたが、これは1983年の調査でも、被調査者の年齢で区分してみると、若い年齢層ほど、環境問題に高い意識度を示したし、1986年の大学生に対する調査でも同様の傾向を示した。また、グッドロー（Goodrow）が米国で大学生を対象として行ったヘルス・コンサーン調査でも環境問題が上位にみられたことから、青年は一般に環境問題に高い問題意識をもっているといつてよかろう⁴⁾。

今回の調査で環境問題について高い意識度を示した第2グループの「過労死」と「ぼけ、ねたきり老人」の問題は、いずれも調査対象の女子大学生の年代ではほとんどかわりがないと考えられるが、これらはいずれも、社会のしくみを変えないと解決困難な問題である。このような問題に大学生が割合に高い問題意識をもっていることも、これまでの調査にもみられる動向である⁷⁾⁸⁾。

そして、第1グループ、第2グループの問題は、社会正義、社会的公正という立場から容認できない問題と考えられ、今回の調査でこれらに高い問題意識を示していることは、わが国の青年の意識の一般的な動向に合致している。

第3グループの「がんによる死亡」、「交通事故による死亡」および「出生率低下」は、調査対象の女子大学生の身近なところで発生している問題であり、女子大学生自身も遭遇する可能性がある問題であるにもかかわらず、あまり問題意識が高くないことも、これまでの調査とほぼ同様の傾向である⁹⁾。

第4グループの「アルコール中毒」および「女性の喫煙」は女子大学生にもみられるライフスタイルとして問題になっているにもかかわらず、問題意識が高くないことは注目すべきことである。そして、これも1986年に行った調査で、男女大学生とも、飲酒に対する問題意識が最も低かったのとほぼ同様の傾向であり、これらの問題をとりあげた健康教育の必要性が示唆される。

健康問題とマスコミ利用・社会等への関心との関連(表4)については、その意味づけ、解釈が困難であり、一層の解析と検討が必要とおもわれる。

まとめ

健康教育カリキュラムを作成するにあたっては、被教育者が健康問題に対して、どのような問題意識をもっているかを明らかにすることが必要である。

そこで、大学生が健康問題にどのような問題意識をもっているかを明らかにし、大学生に対する健康教育カリキュラム作成の基盤資料を得るために、ヘルス・コンサーンに関する調査を実施し、下記のような知見と示唆を得た。

1. 女子大学生は、海洋汚染、大気汚染、水の汚染、地球温暖化のような環境問題ならびにエイズに高い問題意識をもっている。また、過労死、ぼけ、ねたきり老人のような、社会問題とよばれるようなことにも割合に高い問題意識をもっている。

2. 女子大学生が高い問題意識をもっている問題は、いずれも社会正義、社会的公正にという立場から容認できないようなことであり、このような問題に高い問題意識をもつのはわが国の青年に共通にみられることである。

3. 女子大学生の身近かで発生する可能性のある問題と考えられるがん、交通事故による死亡や出生率低下という問題に対する意識はあまり高くないし、女子大学生のライフスタイルの一部でもある飲酒や喫煙に関連したことに対する問題意識が低いことは注目すべきことで、これらの問題は健康教育の重要な課題であることが示唆される。

本調査結果は、和洋女子大学情報処理センターの電子計算機HITAC M 640/10を用いて、SASにより処理、解析を行った。

参考文献

- 1) Bedworth, D.A. and Bedworth A.E. Health Education, p. 76, Harper Grow Publishers, New York 1978
- 2) Fodor, J. and Dalis, G.T., Health Instruction. p. 13-24, Henry Kimpton Publishers,

London 1981

- 3) Eguchi, A. et al; Health Concerns of Parents of School-aged Children in Japan, Hygie 6(4) 27-31, 1987
- 4) Goodrow, B.: Does Time Change the Health Concerns of College Students?, Health Education, 8:34~35, 1977
- 5) 江口篤寿、市村国夫、武田文：日本人のヘルスコンサーンに関する研究 (第1報)、民族衛生50 Suppl. 188, 19984
- 6) 江口篤寿、市村国夫、武田文：日本人のヘルスコンサーンに関する研究 (第2報)、民族衛生51 Suppl. 68~69, 1985
- 7) 江口篤寿、Fodor, J.T., 藤田大輔、市村国夫、岸本弘子：大学生のヘルスコンサーンについて、大学体育研究9, 9~15, 1987
- 8) 1980年国際価値会議事務局：13か国価値観調査データブック366~371, (財)余暇開発センター、東京1980
- 9) 近藤恵子：形態についての自己認識—女子短大生の意識調査を中心として、保健の科学24: 418~422, 1982

江 口 篤 寿 (本学教授)

矢 吹 恭 子 (本学助手補)